LAST HOPE

勝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＡＳＴ　ＨＯＰＥ

【Ｎコード】
Ｎ２２１２Ｏ

【作者名】
勝

【あらすじ】
全ての歯車は小惑星から！！

俺の名前はクリス・ウィリアム・・・テキサスで土木関係の仕事をしている。

同日　深夜

その日はちょうど雨の夜だった。

一台の車があまり車の通らない道路を猛スピードで走る。

事件はその瞬間起こる・・そう急カーブ。

飛ばしている車はほとんど車線を外している。

そこに対向車線から一台の車がやって来る。

両方の運転手が焦るが遅かった。

大きな音を鳴らしながら二台はガードレールを突き破り下の山の中に落ちて行く。

同日　夜　７時

まだ雨の振ってない時間だった。

一人の少年が望遠鏡を覗き込みながら老人に聞く。

「ねえ、あの星何？最近よく見るし、徐々に地球に来てる気が・・・」

それを聞いた老人は読んでいた新聞を投げ飛ばし少年の方に飛んで行く。

「本当だ・・これはまずいな・・うーんＮＡＳＡに調べてもらいに行って来る」

すると、外ではポツポツッと雨が降り始める。

一年後　国連本部会議室

「どうするんだ？小惑星は後一ヶ月と無いうちに地球に追突するんだぞ！」

同日　クリスの工事現場

ガガガガッと穴を機械で掘る。

「おーい。今日はもう上がりだ！帰って良いぞ。明日も宜しくな」

同日　クリス宅

「おかえりー！」

そこにはいつもどうり娘のエミリーが立っている。

「あ、今日はミラー来てるんだ。今ＴＶ見てたとこ・・・お父さんは

ビールとおつまみ？」

クリスはニヤッと笑う。

「さすが！あれ？ミラーはビール飲めたか？久しぶりに一杯と思ってな・・」

エミリーはすぐに答えた。

「もう飲んでる・・・」

呆れ顔でクリスに笑いかける。

リビングに上がるとＴＶをみながらビールを飲んでいるミラーがいる。

「あ、お帰りなさい。クリスさん。先に一杯やらさせていますよ。」

ミラーはビール缶をクリスの方に向て、左右に軽く振る。

「お父さん、そういえば国から手紙来てるよ。どうかしたの？」

エミリーはその手紙をビールと一緒に持ってくる。

「なんだ？俺は知らないぞ・・」

クリスは慎重に封をはさみで切る。

中からは三つオリで白い紙が出てくる。

クリスはそれを開ける。

そこには大統領直筆の文字が並んでいた。

そこにはこう書かれていた。

【クリス・ウィリアム様

　初めまして・・・私はキミが必要だと思いここに手紙を書いた。気があればニューヨークの国連本部に顔を出してくれ

ジョンソン・ダリック】

「国連？どうして俺が？」

そして手紙の裏には日付が記載されていた。　１０月２９日・・・

「明日じゃあないか・・・」

クリスは手紙をまじまじと見て言い放った。

一同は沈黙から徐々に不安げな顔をし始める。

そんな空気を切り替えたのはクリスだった。

「ま・・まあいってみるよ」

そんな夜は更けていった。

翌日　国連本部エントランス

クリスが到着するとすでに数名の男たちがいた。

だが、よく見るとその中にはミラーの姿があった。

クリスは駆け寄り小声で耳打ちをした。

「どうしているんだ？」

ミラーは小声で返した。

「昨日あの後帰ったらあれがあったんだ・・・何かは分からないけど
ここにいる連中はクリスさんや俺のようにただの一般人らしいです
よ・・」

すると、奥のほうからスーツを腕にかかえ、上はカッターにネクタ
イで

下は紺のズボンを履いた男が歩いてきた。

「私の名前はリチャード司令部だ。以後宜しく・・早速だがこっちに
着たまえ。」

会議室のような場所につれてこられたクリスたち。

そこには何か映像を映すための道具が並んでいた。

そして来るなり映像が動き出した。

それは、ＣＧでは決してなく紛れも無く地球の近辺に地球の半分くらいの

惑星が飛行していた。

「これは約半年前見つかった小惑星です。あなた方にはこれを破壊してもらいます。」

一同は顔を見合わせてキョトンとした顔で司令部の顔を見た。

「勿論シャトルの操縦は専属パイロットが行うがその他の作業はキミたちしかできない。訓練は一週間、内容は様々なことをすることになる。拒否はなしだ。悪いが強制だ。」

解散の号令がかかり、一同はヒューストンのＮＡＳＡの訓練施設にやってきた。

同日　施設寮

「お前がクリスって奴か？」

部屋から出ようとしたらいきなり声を掛けられてしまった。
その男は中々体のごつい黒人だった。
「俺はヒック・リリスだ。仕事はお前と同じく土木関係だ。
宜しくな。」
翌日　朝　５時
早速訓練が始まった。
「クリス、キミについてはこのＨＯＰＥというマシンに乗ってもらい、穴を掘る
現場の指揮を取ってくれ。作戦としては現場まで行きこの採掘機で地面を
掘るんだ。そしてその中に小型の核兵器をぶち込み爆発ってわけだ。まずは
こいつの操縦から・・・」
１１月　７日
「二機ともに正常値です。離陸を許可します。パイロット達を乗せてください。」
警報が鳴り、収集がかかった。

赤い宇宙服の肩のワッペンには【全人類の誇り】と書かれている。
すると、向こう側からエミリーがやってきた。
「お父さん、ミラー必ず帰ってきてね・・・」
今にも涙が出そうなのに必死にこらえながら走り去って行った。
「パイロット要請・・」
そして、七人の宇宙飛行士たちは堂々と歩きながらシャトルの方へ向かっていった。
「パイロット投入確認・・PERSON号離陸許可します。」
クリスは外をぼんやりと覗き込んでいた。
「離陸3秒前　2・1・離陸」
機体はゆっくりと前進し始める。
そして、徐々に浮きはじめた頃無線が入った。
「こちらヒューストン・・聞こえるか？」
「良好だ。続けてくれ」
「まずは燃料ステーションに行き、補充するんだ。彼らならうまく

やってくれる・・・お前たちは【全人類の誇り】なんだからな・・・

がんばってくれよ・・・」

そして今未曾有の事態の人類の未来は七人の戦士に託された。

大気圏を向け、数時間白いステーションが見え始める。

シャトルとステーションがドッキングを始める。

ドッキングが完了すると奥から酔っぱらいのような老人が

出て来る。

「俺はリビック大佐だ。そこのボウズ来な。あんまもたもたすんな

よ」

ヒックはミラーの肩を叩き、行ってこいと言う。

ミラーは渋々着いて行く。

「200になったら、このレバーを引きな・・・燃料補給!」

と同時に大きな音が聞こえる。

200に達したメーターを見て、ミラーがレバーを思いっきり引っ

張る。

グググッと良いながらレバーは少し下がるがパキンッと何か折れる

音が

する。

「大佐！レ・・レバーが！」

リビックはそれをみてリビックは走って給油室へ向かうと燃料が

流れていた。

「まずい、爆発する」

ミラーはリビックを連れて必死に走る。

同時刻　ヒューストン

「まだ二人いるぞ」

今にも発進しそうなシャトルに警告する。

二人の飛行士・・名前はチックとローグロウがドアを押さえ込んで

いる。

ミラーとリビックが中に転びはいる。

「よし、発進」

シートベルトを急いで付ける二人を見て操縦士はドッキングを解除

する。

爆発はステーションを完全に破壊する。

小惑星付近

小惑星の大気圏に突入する。

「ゆれるぞ！・・今こそ訓練の成果をおお！」

機体は大きく角度を変える。

スピード上げているにも関わらず小さい隕石を避けて行く。

だがその時、ガンッと音を鳴らし，機体の右翼が破損する。

「まずい、墜落する」

制御の出来なくなった機体は大きな隕石に真正面からぶつかる。

そして機体は墜落する。

「ＰＥＲＳＯＮ号・・・墜落・・しました。」

ヒューストンは固まる。

その時　無線がかかる。

「こちら・・ヒック。全員無事です。任務を遂行します」

彼らは貨物室に逃げ込み、助かったらしい。

ヒューストンは歓喜に浸る。

載せられたＨＯＰＥ号は何とか無事だったため遂に穴を掘り始める。

「１２３ｍ・・・」

と順調に掘り続けていると、ゴゴゴッと地響きが起こり地面に

ヒビがはいる。

「げ！地割れだ」

すると、湯気が上がり始める。

すると、ＨＯＰＥに乗ったローグロウが苦しみながら叫ぶ。

「ぐっ！あ・・暑い・・」

ガスはＨＯＰＥの燃料に引火し、ＨＯＰＥは遠くに飛び散る。

それを受けたヒューストンの将軍は大統領に連絡する。

「了解・・・保管計画Ｂプラン始動」

すると、エレベーターが開き、中から兵士がやって来る。

そして、ヒューストンは制圧される。

ＨＯＰＥの方は核の搭載された小部屋に生き残った５人で準備に

取りかかった。

すると、核の起爆装置のスイッチが入る。

「なんでだ・・こんな所で爆破しても小惑星は消えないはずだ・・

リビック・・キミならできるんだろ？」

「ふん、こいつ恐らくBプランだな・・こいつは大統領命令だ・・

だから無理だな」

すると、クリスは巨大なスペナで起爆装置を叩こうとする。

だが、リビックが腕で止める。

「俺にも家族がいるんだ・・」

リビックはうつむきながら言う。

「俺は・・今まで工事現場で失敗した事は無い・・だからこそ

今度も大丈夫だ。」

クリスはスペナを投げ捨てて言う。

「本当だな？誓うな・・」

「何にだって誓うよ」

リビックは起爆装置を停止停止させる。

一同は最後の準備にかかる。

一同は再びクリスの先導によって、穴を掘り始める。

目標は552mで現在は349m。

先ほどは地割れとガス発生により邪魔されたが今はまだ順調に進んでいる。

「クリス・・キミは地球に帰還したらまず何をする？」

チックが顔をよせた。

クリスはにっかりと笑い答えた。

「ははっ・・まずは娘に会わないとな・・」

そう言って再び作業に取りかかる。

「550、551、552・・やったぞ！」

同時刻　ヒューストン

「よし！核弾頭を放り込め」

その瞬間再び地鳴りとともに地割れが起こる。

さらに先ほどとは比べならない程の大きな物だった。

小核弾頭、一同はなんとか生き残った。

「ぐっ・・核弾頭もみんなも無事みたいだな・・」

クリスが岩の断片を押しのけながら全員の安否を確認する。

「ああ・・・くそっ」

再び掘った穴に向かう。

しかし一同にはきつすぎる現実が待っていた。

なんと、核弾頭の起爆装置が先ほどの地割れにより壊れてしまったのだ。

そして、装置を使うには一人残らなければいけないのだった。

「誰が行く？」

チックが一同に聞く。

「お・・俺が行こう・・」

クリスが震えながら手を挙げる。

「だめだ。ここはうらめっこ無しのくじだ」

と言いくじの紙をパッと出す。

一同はそれぞれくじをひく。

「俺か・・」

落ち込みながら紙を差し出すミラー。

クリスは心の中で呟いた。

《あいつになんて言ってやれば・・》

クリスは娘のことを心配した。

だが、既に小惑星へのエレベーターに乗ろうとしているミラーを見て、考えてる余裕は無かった。

「見て来るよ・・」

と不安げな顔をしているミラーを追っかけエレベーターに乗る。

二人は降りて顔を見合わせる。

すると、いきなりクリスがミラーの宇宙服の酸素を抜く。

ミラーは焦りながらクリスに手を出す。

だがクリスはミラーをまたエレベーターに入れ、ＰＥＲＳＯＮ号に入れる。

一同は驚愕した。

「なんて頑固者なんだ・・あいつは」

だが既に時間は無い。

クリスの事は心残りだが地球に向けて、小惑星を飛び去る。

同時刻　ヒューストンでは奇跡的にクリスの無線電波をキャッチする。

「すまない・・約束・・・」

エミリーは画面に縋る。

「お父さん」

だが小惑星は地球の大気圏にもう１０秒となかった。

「急げ・・クリス」

「８、７・・・」

６に差し掛かった時・・・。

巨大な衝撃波を出しながら小惑星は消えて行く。

地球に帰還したＰＥＲＳＯＮ号、地球を救う

と次の日に出た新聞は全ての人に笑顔を作った。

同日　結婚式場

ローグロウ、クリスの大きな顔写真が並んでいる。

そう、ミラーとエミリーは結婚したのだ。

「彼には見てもらいたかった・・・」

ミラーは「人類の誇り」と書かれたワッペン潰して涙を流す。

ＥＮＤ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2212o/

LAST HOPE

2010年10月9日23時42分発行